
いつか、あの空で～恋天使との約束

遥那智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか、あの空で〜恋天使との約束

【Nコード】

N4786Z

【作者名】

遥那智

【あらすじ】

内気な女子高生・三条ひなは、クラスメイトの越村に片思いを始めてもう1年。ラブレターを渡そうとしては、勇気を出せずに諦める日々を送っていたひなの前に現れたのは、「恋天使」と名乗る、仏頂面の黒スーツの青年だった。

第1話

神様、意気地のない私に、ほんのひとかけらの勇気を下さい
少女はそう願ひ、大切そうに胸に抱えていた手紙に視線を落とし
た。

今にも爆発しそうな程に激しく脈打つ心臓につられて、呼吸も荒
くなる。

乱れた息を正すため、大きく深呼吸をして、再び下駄箱越しに教
室のドアをにらんだ。

(今日こそは、この手紙を渡すんだから……！)

「 ……ひなー、また渡せなかったのぉ？」

緑ヶ丘高校の斜め前に位置する喫茶店「カフェ・クロエ」

大通りに面していて、学校の近くということもあり、いつも満席
状態に近い店内は、今日も賑わっていた。

そんな店内で、ひっそりと窓際に座っている女子高生が2人。

その内の1人、茶髪に限界までミニにした制服スカートをはいた、
今時の女子高生らしい風貌の少女が再び口を開いた。

「あのさあ、ひながそれを大切に持ってたってしょうがないじゃ
ん。

ラブレターなんてモンはさ、渡さないと意味がないんだって」

ひな、と呼ばれた少女は、その言葉に決まり悪げにそっぽを向い
た。

「そんなこと言ったって、越村君、中々1人にならないし、渡す
タイミングが掴めないんだもん……」

小声で言い訳がましく言うひなに、茶髪の少女 ミカは苛立ち

を隠しきれない様子で立ち上がり、勢いよくパンツと机に手をついた。

一瞬、周りの客もミカに気をとられる。

ひなも驚いたように見上げた。

「アンタ今月に入ってから何回チャンスがあったと思ってるの！？アタシがお膳立てしてあげたって「やっぱりダメ〜」とか言ってるし。逃げるし。

もういい加減ここで白黒ハッキリつけなよ！」

ミカが怒るのも無理はなかった。

ひながクラスメイトの越村に片思いを始めてもう1年。

3カ月程前からミカという強力な助っ人が加わって、なんとか越村と話せるようにはなったものの、そこから先の1歩が中々踏み出せないでいた。

携帯のメールアドレスも聞くことができない、口頭でなんてとんでもない……

ならば、古風な手ではあるが手紙を渡そう、と決心したのが2カ月前。

それから今日まではほぼ毎日、ひなは下駄箱の隅でラブレターを渡すチャンスを狙っていたのだった。

もちろんチャンスはいくらでもあった。しかし勇気がなかったのである。

「わかってるけど……」

困ったように見上げるひなを睨みながら、ミカは再び腰を下ろした。

そして腕組みしながら背もたれに体を預け、少し踏ん返り返ったような体勢で、再び口を開いた。

「あのさあ、アタシ越村は結構ひなに気があると思うんだ。

……じゃなかったら、アタシだってこんなに告白するの勧めない

って。

ひなはもつと自分に自信持った方がいいと思うよ」「
先程より少しトーンを下げて、そう言う。

その様子に、本気で心配している様子が表れていた。

ミカの気持ちは有難かった。

いつも自分を励ましてくれ、時には叱ってくれる。

だが、ひなにはどうしても行動的なミカのように、振舞えない
のだった。

そのことがミカを苛立たせるのも、よくわかっている。

「ごめんね」

結局出てくる言葉は、何に対してもかわからない謝罪の言葉。

そして、この言葉でいつも会話は終わるのだった。

ミカはそんなひなの様子に、大きなため息をつきながら伝票を握
り締めた。

「景気付けにカラオケにでも行こっかあ」

また怒らせてしまったと思いついてひなは、その言葉を聞く
とパツとその表情を明るくした。

ミカはひなのわかりやすい感情表現に、失笑する。

(本当のひなは、こんなにカワイイのに)

ミカとて本気で怒っているわけではない。暢気なひなを炊き付け
るつもりであんな態度を取っているのだった。

「バイト代入ったから今日はおごったげる」

ミカはそう言ってニヤリとしながら席を立った。

「大丈夫だよ、いつも迷惑かけてるから私が払うよー！」

伝票を握り締めてレジに向かうミカを追うように、ひなも慌てて
席を立つ。

隣の椅子に置いていたカバンを急いで引き寄せ、財布を取り出し
ながら、レジに向かうミカを追った。

カバンからヒラヒラと舞い落ちた、1枚の手紙に気付くこともなく

「越村隆二様」

いつの間にか、人々が行き交うカフェ前の大通りに、不思議な存在を放つ青年が佇んでいた。

細身の黒スーツに黒シャツというシンプルな装いが、逆にその青年の端正な顔立ちと、スラリとした体軀を際立たせている。

その容姿から、目立ちそうな存在であるはずなのに、その青年に目くれる者は一人もいなかった。まるで、そこに誰もいないかのように、皆通り過ぎる。

青年もそんな人々を少しも気にする様子はなく、長い足を折り曲げ、優雅に手紙を拾い、その手紙の宛名を読み上げた。

そして、ミカの後を慌てて追いかけていくひなの後ろ姿と、その手紙とを交互に見つめた。

「三条ひな……」

手紙を裏返し差出人を確かめ、何かを決心したかのように、つぶやいた。

「この少女に全てを託してみましよう」

第2話

「ミカの言うことだって、わかるけど…」

ラブレター渡すなんて、すっごく勇気があることなんだから。」

あの後3時間カラオケで歌いつぱなしでクタクタになったひなは、自分の部屋に戻ると制服の上着を脱ぎ捨て、ベッドに倒れこんだ。

天井を振り仰ぎながら、さらに独り言を続ける。

「ミカみたいに積極的だったら、私の人生変わってたかなあ。」

小さい頃からそうだ。人の顔色ばかり窺って、自分の言いたいことも満足に言えない。

この町に転校してきた時も、自分から話し掛けることができず、始めの3カ月間は、ほとんど1人で過ごしたようなものだった。

そんな時救いの手を差し伸べてくれたのが、クラスのムードメーカー的存在の越村である。ぽつんと教室の隅にいたひなに、積極的に声をかけてくれたお陰で、今のクラスに馴染むことができたのだ。つた。

とはいえ、未だにミカ意外の人間に、素の自分を出すことはできないでいるのだが……。

枕に抱きつきながら、ゴロゴロとベッドの上を転がる。

2〜3度往復した後、端でピタリと止まると、むくりと起き上がり縁に腰掛けた。

「はーあ。誰か代わりに私の想いを、越村君に伝えてくれないかなあ。」

誰にもなくそう言うと、再びバタリと上半身をベッドに投げ出し、再び枕を抱きかかえた。

「それはできませんが、あなたの力になることはできます」

ひなのつぶやきに答えるようなタイミングで、足元から、聞き覚えのない男の声が聞こえた。

（あれ？テレビつけてたかな）

その声に一瞬驚いたが、深くは考えず、リモコン、リモコンとつぶやきながらゆっくり体を起こす。しかし次の瞬間、その視線に1つの影を捉えると、小さく「ひっ」と息を呑んだ。

（ 誰か、いる……！ ）

ベッドに倒れる一瞬前まで、そこに人などいなかった。

家族も出掛け、部屋どころかこの家に1人の筈だった。

しかし、今自分の目の前には、見知らぬ黒ずくめの男が立っている。

誰もいる筈のない自分の足元に、確かにその男は存在していた

「 × ～ ～ ～ ！ ～ ～ ～ 」

声にならない声を上げながら、必死に壁の方にじりじりと逃げる。ドン、と壁に背を当てながら頭をフル回転させるが、状況が理解できない。

（この人誰！？ど、どどど泥棒！？）

男は、そんなひなの様子をため息混じりに見やると、ゆっくりとベッドに近寄った。

（こないで、こないでー！）

そんなひなの願いもむなしく、男は尚もゆっくり近寄ると、ひなの耳元でなだめるように囁いた。

「すみませんが、騒がないで頂きたい。決して怪しいものではありませんから」

この状況でそう言われて、誰が信じるだろうか。

しかし、その男の低く落ち着いた声には、不思議な安堵感があった。

ひなは固唾をのみながら、密着していた壁から体を離し、ゆっくり

りベッドの上に正座した。

いつの間にか、先程感じていた恐怖感が消えている。

男はその様子を確認すると、元居た場所まで戻り、その懐から一枚の紙切れを取り出した。

「申し遅れました、私こういうものです」

その言葉と共に、目の前に差し出された一枚の紙片をおさらずと受け取ると、ひなは男の顔色を伺いながら、チラリとその紙に視線を落とした。

トレーシングペーパーのように少し透けた、名刺サイズの紙。

紙と言うよりは薄いガラス板のような不思議な材質のそれには、一行だけ、こう書かれてあった。

恋天使 セト

「恋……天使？」

ひなは思わずそう声に出すと、その男 セトを見上げた。

セトは無表情で頷く。

まじまじと名刺とセトとを見つめながら、もう一度つぶやいた。

「天使……」

馬鹿げた話ではあった。

普通この状況で上がりこんで来た人間は、泥棒以外考えられない。あまりに異常な出来事が、正常な思考能力を奪ってしまったのだろうか。

しかし、ひなは頭からこの男の話を疑う気持ちにもなれなかった。現実問題として、自分の目の前にいる男は薄っすらと透けているのである。

よくよく観察すれば、足も地面にはついてはおらず、数センチだけ、浮いているようだ。

かといって、幽霊だの亡霊だのの類ではないようで、おどろおどろしい怖さなど、微塵も感じない。

それどころか、神々しささえ感じていた。

それは、シャープな輪郭に、切れ長の涼しげな目元、バラの花びらのような整った唇に黒々とした艶のある髪…と言った、セトの端麗な容姿のせいなのかもしれないが。

「恋天使とは、この世界の人間の恋愛を手助けする……」

そうですね、あなた方の言葉で言えば、キューピッドと言つものですよ」

おおよそ外見とは不釣合いの『キューピッド』という言葉に、ひなは状況も忘れて、思わず吹き出してしまった。

（　　なんか…キューピッドって言うよりも、死神みたい。黒ずくめだし。）

先程までの身構えた気持ちは、今の笑いと一緒に体の外に放り出されたようだった。

軽くなった心で、クスクスと笑いながらそう思った。

セトはひなの態度に、一瞬その表情をピクリと引きつらせ、咳払いをする。

「確かにキューピッドという柄ではありませんが、死神と言われるのは気分の良いものではありませんね」

まだクスクスと笑いながら「ごめんなさい」と言おうとしたひなは、はた、とその動きを止め、目を見開いてセトを見つめた。

今自分はその言葉を口にしたのだろうか？

「私の…心が…!？」

セトも何かに気付いたかのように、少しだけ目を見開く。

だがすぐに元のポーカーフェイスに戻ると、淡々と言った。

「失礼しました。あなたが無防備に心をさらけ出している時に、私があなたの心を読もうと思えば可能です」

ひなは真っ赤になって、思わず胸の辺りを両手で隠した。

意味がない行動だとはわかっていても、どこを隠したらよいものかわからない。

ぐちゃぐちゃになった心の中で、ただ必死に「読んじゃダメ！」と繰り返した。

「じゃあ、読もうとしないで下さい！」
やっとの思いで、口に出してそう言う。

セトは相変わらずの無表情で答えた。

「あなたがそう望むなら。」

ひなは真っ赤な顔でセトを睨みつけながら、怒ったように口を開いた。

「それで、天使が私に何の用なんですか？」

これは夢なんだ。

そう思い込もうと決めたひなは、強気に出ることにした。

夢の中でまで、言いたいことを我慢する必要はないからだ。

セトはやつと本題に入れたことに気をよくし、少しだけ表情を崩した。

そして、後ろにあった勉強机の椅子に腰掛けると、長い足を組んで極めて真面目な顔で話し掛けた。

「あなたの恋愛成就の手助けに来ました」

ひなは怪訝な顔で聞き返す。

「どうして私なんですか？」

純粹な疑問であった。自分のような平凡な人間に、こんな非凡な出来事が起こるなど考えられない。

実際にセトと会話をしている今でさえ、夢の中の出来事だと思いつつもしているくらいだ。

セトはその言葉で、思い出したように懐に手を入れると、一通の手紙を差し出した。

その手紙を受け取ったひなは、すぐに再び顔を真っ赤にして慌て始めた。

「この手紙、私の……！」

「昏間あなたが喫茶店の前で落とされた手紙です。その手紙であ

あなたに決めました」

ひなは大切そうにその手紙を両手で持つと、チラリとセトに視線を投げた。

セトはその視線に応えるかのように、再び口を開く。

「あなたのご指摘にもありましたように、私はこういった風貌です。」

あなた方が想像する天使やキューピッドのように愛想も良くなければ、

要領も良くありません。その為か、恋愛成就の成功率が他の恋天使よりも

格段に低いのです」

確かに『恋天使』と言われても、あまりにミスマッチな様相だった。

黒ずくめの格好のせいだけではない、セト自身が作り出している、人を寄せ付けない

独特な雰囲気から、恋愛のイメージが全く湧かないのである。

「……実はこれは私にとって最後のチャンスなのです。」

今度、つまりあなたの恋愛が成就出来なかった場合、私は恋天使を除名されてしまうのです」

「除名されたら……どうなっちゃうの？」

ひなは恐る恐る尋ねる。

セトは眉間に深い皺を作ると、難しそうな顔で言った。

「他の任に回されます。おそらく、魂の回収などでしょうね」

「それって、死神みたいなもの？」

「いえ、死神はその人間の魂を強引に連れ去るのです。『回収』

とは、天国へ帰る魂の水先案内に過ぎません」

そこでセトは言葉を区切ると、椅子から立ち上がりひなに背を向けた。

そしてベランダから見える、薄っすらと星が輝き始めた空を見上

げ、続ける。

「……人間の死の現場には様々な想いが漂っています。残された人間の、悲しみや不安や絶望。

私は……そういった人間の激しい感情というものが苦手なのです。私自身に感情が無いからなのかも知れませんが」

ひなは、セトの薄く透けた背中を見つめながら聞いた。

「天使は……みんな感情がないの？」

セトは再び部屋の中に視線を戻すと、ひなの目をまっすぐに見つめながら応えた。

相変わらずの無表情だが、ひなにはそのセトの視線が、少しだけ寂しげなものに感じた。

「いえ、天使と言えども、感情の点においては普通の人間と大差ありません。

……私は欠陥品なのだと思います」

ひなはセトにかける言葉が見つからず、変わりに努めて明るい声で言った。

「じゃあとにかく、あなたは私の恋の手助けをしてくれるのね？

それで、私の恋が上手く行けば、あなたも恋天使を辞めずに済んで全てが丸く収まるのね？」

「はい」

ひなは微笑みながら、ベッドから立ち上がった。

そして右手を差し出す。

「じゃあ……これからよろしくお願いします」

セトは少し驚いたような顔をしたが、同じように右手を差し出した。

ホログラムのようなセトの手に触れることはできなかったが、2人は気持ちの上で、硬い握手を交わした。

第3話

朝の空気は好きだ。

もう初夏だというのに、少し肌寒い、ピンと張り詰めた空気。これから町が動き出す充電をしているような、そんな雰囲気。いつもこの清々しい空気を吸い込みながら、学校に行くのが好きだった。しかし、今日はいつもと様子が違う。ひなの傍らには、セトがいるからだ。

「それでは対策を立てるため、いくつかあなたに質問します」
昨夜の出来事は、朝目覚めれば全てが夢でした…と終わるはずだった。

だが、目覚めても終わらない夢。それはもう、現実以外の何者でもなかった。

どう否定しても、どう見えないふりをしても、セトはそこにいる。幻覚でもなんでもなく、今朝もこうやってひなに語りかけてくるのだ。

「恋愛対象者は越村隆二。あなたのクラスメイトですね？」

「はい。」

多少投げやり気味にそう答える。

そして自分の少し後ろをふわふわと付いて来るセトを、チラリと横目で眺めた。

ふわふわ、と言っても、あからさまに地面から離れて浮いている訳ではない。

ほんの数センチ、地面から足が離れているだけだった。遠目に見れば、普通に歩いているのと変わらないように見えるだろう。

そういえば、某ネコ型ロボットもそうだったな、とふと思いつく。常に地面から数センチ浮いているから、足を拭かずに家が上がっても怒られないのだそうだ。

ひなはそこまで考えた所で、セトとそのネコ型ロボットの姿を重ね合わせ、吹き出した。

（おかしすぎる！）

声を押し殺しながらプルプルと肩を震わせているひなを、少しも気にかける様子もなく、セトは淡々と質問を続けた。

「好きになつたきつかけは？」

「えええ、そんなことまで答えるの？は、恥ずかしいんだけど…」

ポーカーフェイスで、心の中にずかずかと入り込んでくるセト。

しかし今は恥ずかしがっている場合ではない。「恋愛成就の手助けをする」という言葉を信じ、すぎるしかないのだった。

「私、一年半位前に親の都合でこの町に来たの。消極的な方だから…初めの頃はほとんど友達いなかっただ。でも越村君だけは話し掛けてくれて…」

その時の様子を思い出し、ひなは頬を赤らめた。

しかしセトは少女の甘い回想すらもお構いなしに、話を続ける。

「なるほど、それで惹かれた、と。ありがちな話ですね。」

思い出に浸る暇も与えず、傍若無人な物言い。

さすがにムツとしたひなは、少し意地悪な声色でセトに言った。

「天使だったらそんなこと聞かなくても、なんでもわかるんじゃないの？」

これにもセトは表情を崩さず答える。

「それは…あなたの心を読めば簡単な話ですが。いいのですか？それで」

そう言われてしまえば、返す言葉がない。ひなはキツと睨みつけることで、答えを伝えた。

セトはその視線に気づくと、ため息を1つこぼし、どこからともなく取り出した黒い大きなノートに視線を落とした。

「現在の状態、諸々の障害などを考えて、恋愛成就率を表すと…」

「…およそ40%ですね」

「そんなはつきり数字で見えちゃうの！？そしてそんなに低いの！？」

ズンツと肩に大きな岩でも落ちてきたかのような衝撃。ひなはがつくりと肩を落とすと、大きなため息をついた。

確かに、挨拶すら満足に交わすことのできないこの状況で、越村が自分のことを好きになつてくれる可能性は少ないだろう。

ある程度覚悟はしていたが、実際数字を突きつけられると言葉も出なかった。

「実際に私に見えるのはもっと漠然としたイメージですが、数字に変えた方がわかりやすいかと思ひまして。

……とにかくこの成功率を上げるために、私が力を貸して差し上げるんです。ですからそう落ち込まないで下さい」

慰めのつもりなのかセトはそう言つと、ひなの肩に手を置いた。実際にセトの手のぬくもりや重さを感じることはできないが、ひなはその行動に、少しだけ救われた。

「とにかく自分を印象付けることから始めましょう。挨拶は欠かさずに。好感度が上がり始めたら、プレゼントなどの物的攻撃で…

…」

自信満々に話し続けるセトを横目で見る。一体どこからこの自信が来るのだろうか。

そして恋愛ゲームの攻略法のような発想で、本当に大丈夫なのだろうか。

ひなは「他の恋天使より成績が悪い」と言っていた理由が少しだけ垣間見えた気がして、一気に不安が増したのだった。

「オハヨー、ひな！」

「あ、おはよ、ミカ……」

生徒でこつた返している正門で、ミカはひなの姿を見つけると、

ぶんぶん手を振りながら駆け寄ってきた。

そして拳動不審なひなの様子に、小首を傾げる。

ひなは辺りをキョロキョロとせわしなく見渡していた。かと思うと、何事か小声でぶつぶつぶつつばやいている。

「ひな？」

ひなはセトが他の人間に見えないか、不安だったのだ。

人通りが多くなる前に尋ねた時「私が姿を見せようと思った人間にしか、見ることはできません」セトはこう答えたが、まかり間違えて誰かに見えていたら、と考えると気が気ではなかったのである。

あたりを一通り見渡して、誰もセトに気づいていないことを確認すると、ひなはやつと納得し、ミカに向き直った。

「ごめんね、なんでもない」

ミカはまだ不思議そうな顔をしていたが、すぐに昨日のドラマの話題に切り替えると、楽しそうに語り出した。

（確かにセトが見えてたら大騒ぎだよな）

ミカとの会話も話半分に、セトのことを考える。そう思いながら一人クスリと笑った。

さすがに天使というだけあって、セトは綺麗な顔立ちをしている。そして、独特の雰囲気を持っていった。

人を寄せ付けないような、張り詰めた空気。

でも、ひなはその雰囲気嫌いではなかった。まるで朝の空気に似ていると思ったからである。

これであと少し愛想がよければ、自分ももつと素直に対応できたのにと、他人事のように思った。

「あ、ひな、越村だヨ！」

「えっ!？」

セトに気をとられていたひなは越村に対する心の準備が出来ておらず、慌ててミカの後ろに隠れた。

そしてキヨロキヨロと辺りを見回し、その前方、丁度校舎に入っていく越村の姿を見つけた。

「ホラ、挨拶くらいしておいでよ」

「彼が越村君ですね。まずは挨拶からです」

ミカとセト、2人にそう言われ、ひなは言葉に詰まる。

「挨拶は人間にとって大切なものです。継続すれば、その人間の心すら動かすこともできます。さあどうぞ」

「さあどうぞって！そんな簡単に出来たら、神頼みなんかしないってば！」

セトはひなの様子に、深いため息をついた。ミカはミカで、ひなの言葉に眉間に皺を寄せる。

「は？何？神頼み？」

しまった、という風にひなが口を押さえた瞬間、校舎内に始業を続けるチャイムの音が鳴り響いた。

周りを歩いていた他の生徒も、一斉に駆け出す。

ひなはこれ幸いと「ホラ、遅刻しちゃう」とミカの手を引っ張り、駆け出した。

ミカは納得行っていないような表情だったが、いつになく強引なひなにつられ、とにかく走り出した。

第4話

嫌いな授業の時間は、好きな人のことをゆっくり観察できる。

壇上では、いつもヒステリックに喋る、バーコード頭の先生「田坂九八朗（通称QT）」が熱弁を振るっていた。

現代文の時間、ひなはいつものように、窓際の越村をチラチラと盗み見していた。

席替えの時、ミカの計らいで越村の隣の席に座るチャンスはあったのだが、ひなが選んだのは、越村から斜め後ろのこの席。

ミカは消極的過ぎると怒ったが、ひなから斜め後ろのこの席と越村を観察できるこの席の方が、得だと思ったのだ。

（あ、居眠りしてる）

ぼかぼかと暖かい日差しに包まれた窓際の席で、越村はこっくりこっくりと居眠りを始めていた。

（かわいい）

ひなは微笑みながら、越村の様子を眺めていた。

そんなひなに、セトは相変わらずの冷たい声で言い放つ。

「そうやって見ているだけでは、想いは伝わりませんよ」

ひなは自分の真横で、腕組みしながら立っているセトを思い切り睨みつけた。

言葉に出すことはできないので、ノートの片隅に反撃の言葉を書き殴る。

（わかってる！）

「わかっていません。あなたの恋愛が成就しないと私も困るので」

ひなは再びシャーペンの芯をカチカチ忙しく押し出すと、その下に書き足した。

（じゃあどうすればいいの）

「行動を起こしてください。今朝のように挨拶すら満足にできな

い今の状態では、いつになっても確率は上がりません。大体あなたは……」

「もう、わかったってば！」
痛いところをつかれて、思わずそう叫ぶ。
ハツと我に返った時には、もう遅かった。

辺りを見回すと、そこには何故か立たされている越村と、啞然とした顔でこちらを見ているQ.Tの姿があった。

Q.Tは眉間に深い皺を刻みながら、その肩をふるふると振るわせ
ている。

「何がわかったんだ、三条。……あとで職員室に来なさい」
低い声でそう言ったところで、授業の終わりを告げるチャイムが
鳴り響いた。

昼休み、ひなはいつも通りミカと裏庭でお弁当を広げていた。ミ
カは先程から興奮冷めやらぬ様子でひなに話し掛けている。

「現代文の時間、ひな超かつこよくなかった!? 見直したヨ!!」
ひなはタコさんウイナーにフォークを突き刺しながら、口を尖
らせる。

「あれはQ.Tに言ったんじゃ、なかったのに……」
ひなが叫んだあの時、越村は居眠りが見つかり、ぐちぐちと絞ら
れている最中だったらしい。皆が「いい加減しつこい」と思ってい
た所にひなのあの言葉だ。

結果的に越村を助ける形になったのは良かったとしても、今後の
事を考えると頭が痛い。

Q.Tに目をつけられた者は、授業中、特に難しい問題の時に指名
され、答えられなかった場合は皆の前で吊るし上げられる。

ただでさえ現代文の成績が悪いひなは、次回から、憧れの越村の
前で恥をかかされる可能性が高くなったのだ。

それもこれも、全てセトのせい。

ひなは木の上に優雅に腰掛けているセトを見上げた。

セトはその視線に気付かず、遠くを見つめている。その悪びれない様子に、ひなはさらに口をへの字に曲げた。

「あ、誰だろ？」

とその時、ミカのケイタイが派手に鳴り響いた。慌てて電話に出たミカのトーンが、半音上がる。どうやら最近付き合い始めた、他校の彼氏からのようだ。

ミカは肩でケイタイを挟み、ゴメンと手で拝んで見せると、そそくさと去って行った。

「いいなあ」

ミカの後姿を見送りながら、そっぽやく。

セトはその言葉を聞き逃さず、すかさず木の上から舞い降りた。

「友達を羨ましいと思う前に、努力して下さい。……私を越村君だと思って練習してみましようか」

「練習って？」

きよとんとセトを見上げる。

「気軽に話す練習です。今私と話しているように。そうですね、無難に天気の話などから始めましょう」

「練習して喋れるようなもんじゃ……」

セトは言い訳がましく喋るひなに、冷たい視線を投げた。

その視線をまともに受け、一瞬言葉が詰まる。そして諦めたようにため息をつく、気合いを入れてセトを見つめ直した。

自分の中でシミュレーションする。

(自分の前にいるのは、セトじゃなくて越村君。セトじゃなく、越村君……)

そこまで考えた所で、自分の顔が見る見る赤くなっていくのを感じた。

心なしか、手も震えてきたような気がする。

「き、今日はい、いいいい、おお天気です、ねっ……！」

一瞬の沈黙。

次の瞬間、真っ赤になったひなの前で、セトが小さく吹き出した。

「……早口言葉の練習も必要ですね」

初めて見た、セトの本当の笑顔。切れ長の目が微かに細められただけで、その場の空気が変わった。

先程の冷たい視線の時とは全く違う、暖かい空気がセトを包んでいるようだった。

(天使なんだ…ホントに……)

ひなは一瞬その笑顔に見とれたが、すぐに元のポーカーフェイスに戻ったセトを見ると、ぶんぶんと首を振って気を取り直した。

「は、早口言葉なら言えるもん！なまむぎなまごめなまたまご！となりのかきはよくきやくうかきだ！！」

間違っている早口言葉を自慢げに言い終えた途端、ひなの後ろでくっくつと笑いを噛み殺しているような声が聞こえた。

慌てて振り向く。

「あ、こ、越村君！」

そこに立っていたのは、他でもない、越村だった。

部活で焼けた浅黒い肌に、さっぱりとした短髪。ハッキリとした目鼻立ちに、サッカー部キャプテンということもあってか、越村は学年を問わず人気が高かった。

当然、競争率も高い。

「さつきはありがとな、マジで助かった！」

両手を合わせ、拝むようなポーズで笑顔を見せる。そんな越村に、ひなは1人で慌てていた。

「朝練キツくてさー、あの時間いつも眠っちゃうんだよな。……」

で、三条はこんなトコで何してんの？」

「あ、ミカと一緒にお弁当……食べて……」

しどろもどろになりながら、懸命に答えを返す。

先ほどのセトへの態度とは全く違う、他人と接する時のいつものひなに戻ってしまっていた。

「いつもここで食べてんだ。それ三条の手作り？」

うん、と返事をする間もなく、越村はひなのお弁当に手を伸ばす

と、そこからキレイに巻かれた卵焼きを1つ、つまみ食いした。

「うめー！俺いつも購買のパンだからうらやましいよ」
そう言っただけで屈託無く笑う。

「あの、よかつたら私、越村君のお弁当も作ってこようか？」

（ えっ！？ ）

その言葉に、ひなは目を見開いた。

自分の声色だが、自分から発せられた声ではない。

何がなんだかわからない、という風に口を押さえる。そしてきよるきよると辺りを見回した。

「マジで？サンキュー！」

「え？え？あの……！？」

越村はそう言うと、上機嫌で校舎へと戻っていった。1人状況が掴めないひなは、その後ろ姿を見送りながら呆然と立ち尽くしている。

（ 私、今喋った？例え喋ったとしても…… ）

自分があんな積極的な言葉を言えるはずがない。考えられる可能性は

「これで一步前進ですね」

「セト！！私の声色を……！？」

「良かったですね。練習の成果がこんなに早く表れて」

再び木の上から様子を見ていたセトは、そう言うとニヤリと笑った。

翌日、ひなは約束通り、越村にお弁当を作ってもらった。

その日は渡すだけで逃げたのだが、ミカの強い押しもあって、2回目にお弁当を作ってきた時には、裏庭で一緒に食べる事ができた。もともと料理が好きだったひなのお弁当は越村に評判が良く、越村もひなのことはまんざらでもないように思えた。

その為か、セトはここ数日機嫌がいい。

日曜日の今日は、更なるステップアップの為「笑顔の練習」の真
っ最中だった。

「あなたはすぐ俯く癖がありますね。そのお陰で、せっかくの豊
かな表情も隠されてしまうのです」

そう言うと、セトはひなの表情を覗き込むように屈む。

ひなはあまりに近くにセトの端麗な顔が近づけられたので、緊張
していた。

「まだ表情が硬いですね」

「セトのせいなんだけど」とは言えず、更に俯く。

「俯いては駄目です」

「もう!……あ、そうだ、じゃあセトがお手本を見せてよ」

ニヤリ、と悪戯っぽく笑う。

「手本……ですか?」

今度はセトがたじろぐ番だった。その表情に明らかに困惑の色を
浮かべ、腕組みをしてそわそわし出す。

その様子がなんだかかわいくて、ひなはここぞとばかりに強気に
出た。

「そうよ。セトだってもうちょっと天使らしく、愛想よくした方
がいいと思う!」

その言葉に心を動かされたのか、セトは極めて真面目な顔で言っ
た。

「やはりそうでしょうか?」

ひなは無言で何度も頷くと、椅子を引き出し、そこにセトを座ら
せた。

「いい?まず口の端をこう持ち上げて……」

そう言いながら笑顔を作る。セトはそれを懸命に真似した。

「こうでしょうか?」

「目が笑ってない!」

ひなの厳しい指摘が飛ぶ。

「これではどうでしょうか?」

「口の端が引きつってる！」

「では、これは？」

「怒って見える！」

しばらくの問答の末、セトはがくりと膝をついた。

「案外難しいものですね……」

ひなはセトのその様子を見ながら、小さくガッツポーズを取る。

そして床に体育座りをして、今度はこちらからセトの顔を覗き込んだ。

「笑顔って無理に作るものじゃないと思うんだ。本当に楽しかったり、嬉しかったりした時に自然に出てくるものだと思う」

セトはひなのその言葉に、驚いたように顔を上げた。

そして改めて床に座り直すと、しばらく何かを考えている風に黙った。

「……そうですね、練習してできるようなものではありませんね
そうつぶやき、ひなの顔を見つめた。

ひなは満足げな笑顔を浮かべる。

セトも、思わずその笑顔につられて、顔がほころんだ。

「あ、それ！今の顔！」

「は？」

「今の顔！すっごく素敵」

セトはひなのその言葉に、ほんの少し顔を赤らめた。

ひなには気づかれない程度の、ほんの少しのものだったが

「最近ひなって変わったよね」

放課後、日課になっている「カフェ・クロエ」で、2人はいつもの席にいた。

セトは、少し離れたところで、あたかも客のように英字新聞を広

げ、くつろいでいる。

「なんていうか、明るくなった。越村に対しても、結構積極的になったしさ。なんかすごいイイカンジ！」

ミカは満足げにそう言うと、カラカラとストローで氷をつついた。

「越村のお陰だね。恋のチカラってすごいねー」

からかうようにそう言うミカに、ひなは慌てて否定した。

「ち、違ったら。」

最近、ひなは俯かなくなった。

そのお陰で、もともと豊かなひなの表情が、生かされるようになったのである。

でもそれは、越村のお陰だろうか？確かに越村のためにキレイになりたいと願ったが、今のひなの明るい表情は、セトとのやりとりで培われていったものだ。

ひなはチラリとセトを振り向いた。

セトは、その視線には気づかず、相変わらず小難しそうな新聞に視線を落としている。

「なーに、否定してんのよ」

ミカが再びからかうようにそう言う。

そう、別に否定する必要はない。自分は越村の為に、明るく積極的になりたかった。

セトは、その目標の為に手を貸してくれているだけ。ただそれだけなのだ。

そう自分に言い聞かせる。

だが、心の片隅で何かが引っかかっているような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4786z/>

いつか、あの空で～恋天使との約束

2012年1月6日01時49分発行